刺青

谷崎潤一郎

其れはまだ人々が「愚おろか」と云う貴い徳を持って居て、世の中が今のように激しく軋きしみ合わない時分であった。殿様や若旦那の長閑のどかな顔が曇らぬように、御殿女中や華魁おいらんの笑いの種が盡きぬようにと、饒舌じゃうぜつを売るお茶坊主だの幇間だのと云う職業が、立派に存在して行けた程、世間がのんびりして居た時分であった。女定九郎、女自雷也、女鳴神、――当時の芝居でも草双紙でも、すべて美しい者は強者であり、醜い者は弱者であった。誰も彼も挙こぞって美しからんと努めた揚句は、天稟てんぴんの体へ絵の具を注ぎ込む迄になった。芳烈な、或は絢爛な、線と色とが其の頃の人々の肌に躍った。

馬道を通うお客は、見事な刺青ほりもののある駕籠舁かごかきを選んで乗った。吉原、辰巳の女も美しい刺青の男に惚れた。博徒、鳶の者はもとより、町人から稀には侍なども入墨いれずみをした。時々両国で催される刺青会では参会者おの／＼肌を叩いて、互に奇抜な意匠を誇り合い、評しあった。

清吉と云う若い刺青師ほりものしの腕きゝがあった。浅草のちゃり文、松島町の奴平やつへい、こんこん次郎などにも劣らぬ名手であると持て囃されて、何十人の人の肌は、彼の絵筆の下に絖地ぬめじとなって擴げられた。刺青会で好評を博す刺青の多くは彼の手になったものであった。達磨金だるまきんはぼかし刺ぼりが得意と云われ、唐草権太は朱刺しゅぼりの名手と讃えられ、清吉は又奇警な構図と妖艶な線とで名を知られた。もと豊国国貞の風を慕って、浮世絵師の渡世とせいをして居たゞけに、刺青師に堕落してからの清吉にもさすが畫工えかきらしい良心と、鋭感とが残って居た。彼の心を惹きつける程の皮膚と骨組みとを持つ人でなければ、彼の刺青を購あがなう訳には行かなかった。たま／＼描いて貰えるとしても、一切の構図と費用とを彼の望むがまゝにして、其の上堪え難い針先の苦痛を、一と月も二た月もこらえねばならなかった。

この若い刺青師の心には、人知らぬ快楽と宿願とが潜んで居た。彼が人々の肌を針で突き刺す時、真紅に血を含んで脹れ上る肉の疼うずきに堪えかねて、大抵の男は苦しき呻き声を発したが、其の呻きごえが激しければ激しい程、彼は不思議に云い難き愉快を感じるのであった。刺青のうちでも殊に痛いと云われる朱刺、ぼかしぼり、――それを用うる事を彼は殊更喜んだ。一日平均五六百本の針に刺されて、色上げを良くする為め湯へ浴つかって出て来る人は、皆半死半生の体ていで清吉の足下に打ち倒れたまゝ、暫くは身動きさえも出来なかった。その無残な姿をいつも清吉は冷やかに眺めて、

「嘸さぞお痛みでがしょうなあ」
と云いながら、快こころよさそうに笑って居る。
意気地のない男などが、まるで知死期ちしごの苦しみのように口を歪め歯を喰いしばり、ひい／／と悲鳴をあげる事があると、彼は、
「お前さんも江戸っ児だ。辛抱しなさい。――――この清吉の針は飛び切りに痛いてえのだから」
こう云って、涙にうるむ男の顔を横目で見ながら、かまわず刺ほって行った。また我慢づよい者がグッと胆を据えて、眉一つしかめず怺えて居ると、
「ふむ、お前さんは見掛けによらねえ突つっ張者だ。――――だが見なさい、今にそろ／／疼うずき出して、どうにもこうにもたまらないようになろうから」
と、白い歯を見せて笑った。

彼の年来の宿願は、光輝ある美女の肌を得て、それへ己れの魂を刺り込む事であった。その女の素質と容貌とに就いては、いろ／／の注文があった。啻たゞに美しい顔、美しい肌とのみでは、彼は中々満足する事が出来なかった。江戸中の色町いろまちに名を響かせた女と云う女を調べても、彼の気分に適かなった味わいと調子とは容易に見つからなかった。まだ見ぬ人の姿かたちを心に描いて、三年四年は空しく憧あこがれながらも、彼はなお其の願いを捨てずに居た。
丁度四年目の夏のとあるゆうべ、深川の料理屋平清ひらせいの前を通りかゝった時、彼はふと門口に待って居る駕籠の簾のかげから、真っ白な女の素足のこぼれて居るのに気がついた。鋭い彼の眼には、人間の足はその顔と同じように複雑な表情を持って映った。その女の足は、彼に取っては貴き肉の宝玉であった。拇指おやゆびから起って小指に終る繊細な五本の指の整い方、絵の島の海辺で獲れるうすべに色の貝にも劣らぬ爪の色合い、珠のような踵きびすのまる味み、清冽な岩間の水が絶えず足下を洗うかと疑われる皮膚の潤沢。この足こそは、やがて男の生血に肥え太り、男のむくろを蹈みつける足であった。この足を持つ女こそは、彼が永年ながねんたずねあぐんだ、女の中の女であろうと思われた。清吉は躍りた
つ胸をおさえて、其の人の顔が見たさに駕籠の後を追いかけたが、二三町行くと、もう其の影は見えなかった。
清吉の憧れごゝちが、激しき恋に変って其の年も暮れ、五年目の春も半ば老い込んだ或る日の朝であった。彼は深川佐賀町の寓居で、房楊枝ふさようじをくわえながら、錆竹さびたけの濡れ縁に萬年青おもとの鉢を眺めて居ると、庭の裏木戸を訪おとなうけはいがして、袖垣のかげから、ついぞ見馴れぬ小娘が這入って来た。
それは清吉が馴染の辰巳の藝妓はおりから寄こされた使の者であった。
「姐さんから此の羽織を親方へお手渡しゝて、何か裏地へ絵模様を畫いて下さるようにお頼み申せって……」
と、娘は鬱金うこんの風呂敷をほどいて、中から岩井杜若いわいとじゃくの似顔畫のたとうに包まれた女羽織と、一通の手紙とを取り出した。

https://roudoku-bunko.org

其の手紙には羽織のことをくれ／〃／も頼んだ末に、使の娘は近々に私の妹分として御座敷へ出る筈故、私の事も忘れずに、この娘こも引き立てゝやって下さいと認したゝめてあった。
「どうも見覚えのない顔だと思ったが、それじゃお前は此の頃此方こっちへ来なすったのか」
こう云って清吉は、しげ／＼と娘の姿を見守った。年頃は漸う十六か七かと思われたが、その娘の顔は、不思議にも長い月日を色里いろざとに暮らして、幾十人の男の魂を弄もてあそんだ年増のように物凄く整って居た。それは国中の罪つみと財たからとの流れ込む都の中で、何十年の昔から生き代り死に代ったみめ麗しい多くの男女の、夢の数々から生れ出づべき器量であった。
「お前は去年の六月ごろ、平清から駕籠で帰ったことがあろうがな」
こう訊ねながら、清吉は娘を縁へかけさせて、備後表びんごおもての台に乗った巧緻な素足を仔細に眺めた。
「えゝ、あの時分なら、まだお父さんが生きて居たから、平清へもたび／＼まいりましたのさ」
と、娘は奇妙な質問に笑って答えた。
「丁度これで足かけ五年、己はお前を待って居た。顔を見るのは始めてだが、お前の足にはおぼえがある。――――お前に見せてやりたいものがあるから、上ってゆっくり遊んで行くがいゝ」
と、清吉は暇を告げて帰ろうとする娘の手を取って、大川の水に臨む二階座敷へ案内した後、巻物を二本とり出して、先ず其の一つを娘の前に繰り展ひろげた。
それは古の暴君紂王ちゅうおうの寵妃ちょうひ、末喜ばっきを描いた絵であった。瑠璃珊瑚るりさんごを鏤ちりばめた金冠の重さに得堪えぬなよやかな体を、ぐったり勾欄に靠もたれて、羅綾らりょうの裳裾もすそを階きざはしの中段にひるがえし、右手に大杯を傾けながら、今しも庭前に刑せられんとする犠牲いけにえの男を眺めて居る妃の風情ふぜいと云い、鉄の鎖で四肢を銅柱へ縛ゆいつけられ、最後の運命を待ち構えつゝ、妃の前に頭をうなだれ、眼を閉じた男の顔色と云い、物凄い迄に巧に描かれて居た。
娘は暫くこの奇怪な絵の面おもてを見入って居たが、知らず識らず其の瞳は輝き其の唇は顫えた。怪しくも其の顔はだん／＼と妃の顔に似通にかよって来た。娘は其処に隠れたる真の「己おのれ」を見出した。
「この絵にはお前の心が映って居るぞ」
こう云って、清吉は快こゝろよげに笑いながら、娘の顔をのぞき込んだ。
「どうしてこんな恐ろしいものを、私にお見せなさるのです」
と、娘は青褪あおざめた額ひたいを擡もたげて云った。
「この絵の女はお前なのだ。この女の血がお前の体に交って居る筈だ」
と、彼は更に他の一本の畫幅を展げた。

それは「肥料」と云う畫題であった。畫面の中央に、若い女が桜の幹へ身を倚せて、足下に累々と斃たおれて居る多くの男たちの屍骸むくろを見つめて居る。女の身辺を舞いつゝ凱歌かちどきをうたう小鳥の群、女の瞳に溢れたる抑え難き誇りと歓びの色。それは戦たゝかいの跡の景色か、花園の春の景色か。それを見せられた娘は、われとわが心の底に潜んで居た何物かを、探りあてたる心地であった。

「これはお前の未来を絵に現わしたのだ。此処に斃れて居る人達は、皆これからお前の為めに命を捨てるのだ」

こう云って、清吉は娘の顔と寸分すんぶん違わぬ畫面の女を指さした。

「後生ごしょうだから、早く其の絵をしまって下さい」

と、娘は誘惑を避けるが如く、畫面に背そむいて畳の上へ突俯つっぷしたが、やがて再び唇をわなゝかした。

「親方、白状します。私はお前さんのお察し通り、其の絵の女のような性分を持って居ますのさ。――だからもう堪忍して、其れを引っ込めてお呉んなさい」

「そんな卑怯なことを云わずと、もっとよく此の絵を見るがいゝ。それを恐ろしがるのも、まあ今のうちだろうよ」

こう云った清吉の顔には、いつもの意地の悪い笑いが漂って居た。

然し娘の頭つむりは容易に上らなかった。襦袢じゅばんの袖に顔を蔽うていつまでも突俯したまゝ、

「親方、どうか私を帰しておくれ。お前さんの側に居るのは恐ろしいから」

と、幾度か繰り返した。

「まあ待ちなさい。己がお前を立派な器量の女にしてやるから」

と云いながら、清吉は何気なく娘の側に近寄った。彼の懐には嘗て和蘭医から貰った麻睡剤の壜が忍ばせてあった。

日はうらゝかに川面を射て、八畳の座敷は燃えるように照った。水面から反射する光線が、無心に眠る娘の顔や、障子の紙に金色こんじきの波紋を描いてふるえて居た。部屋のしきりを閉たて切って刺青の道具を手にした清吉は、暫くは唯恍惚うっとりとしてすわって居るばかりであった。彼は今始めて女の妙相みょうそうをしみ／〃／味わう事が出来た。その動かぬ顔に相対して、十年百年この一室に静坐するとも、なお飽くことを知るまいと思われた。古のメンフィスの民が、荘厳なる埃及エジプトの天地を、ピラミッドとスフィンクスとで飾ったように、清吉は清浄な人間の皮膚を、自分の恋で彩いろどろうとするのであった。

やがて彼は左手の小指と無名指と拇指の間に挿んだ絵筆の穂を、娘の背にねかせ、その上から右手で針を刺して行った。若い刺青師の霊こゝろは墨汁の中に溶けて、皮膚に滲にじんだ。焼酎に交ぜて刺り込む琉球朱の一滴々々は、彼の命のしたゝりであった。彼は其処に我が魂の色を見た。いつしか午ひるも過ぎて、のどかな春の日は漸く暮れかゝったが、清吉の手は少しも休まず、女の眠りも破れなかった。娘の帰りの遅きを案じて迎いに出た箱屋迄が、

「あの娘こならもう疾うに帰って行きましたよ」
と云われて追い返された。月が対岸の土州としゅう屋敷の上にかゝって、夢のような光が沿岸一帯の家々の座敷に流れ込む頃には、刺青はまだ半分も出来上らず、清吉は一心に蝋燭の心しんを掻き立てゝ居た。
一点の色を注ぎ込むのも、彼に取っては容易な業わざでなかった。さす針、ぬく針の度毎に深い吐息をついて、自分の心が刺されるように感じた。針の痕は次第々々に巨大な女郎蜘蛛じょろうぐもの形象かたちを具そなえ始めて、再び夜がしら／＼と白み初そめた時分には、この不思議な魔性の動物は、八本の肢あしを伸ばしつゝ、背一面に蟠わだかまった。
春の夜は、上り下りの河船かわふねの櫓声ろごえに明け放れて、朝風を孕はらんで下る白帆の頂から薄らぎ初める霞の中に、中洲、箱崎、霊岸島の家々の甍いらかがきらめく頃、清吉は漸く絵筆を擱おいて、娘の背に刺り込まれた蜘蛛のかたちを眺めて居た。その刺青こそは彼の生命のすべてゞあった。その仕事をなし終えた後の彼の心は空虚うつろであった。
二つの人影は其のまゝ稍※(二の字点、1-2-22)暫く動かなかった。そうして、低く、かすれた声が部屋の四壁にふるえて聞えた。
「己はお前をほんとうの美しい女にする為めに、刺青の中へ己の魂をうち込んだのだ、もう今からは日本国中に、お前に優まさる女は居ない。お前はもう今迄のような臆病な心は持って居ないのだ。男と云う男は、皆なお前の肥料こやしになるのだ。……」
其の言葉が通じたか、かすかに、糸のような呻き声が女の唇にのぼった。娘は次第々々に知覚を恢復して来た。重く引き入れては、重く引き出す肩息に、蜘蛛の肢は生けるが如く蠕動ぜんどうした。
「苦しかろう。体を蜘蛛が抱きしめて居るのだから」
こう云われて娘は細く無意味な眼を開いた。其の瞳は夕月の光を増すように、だん／＼と輝いて男の顔に照った。
「親方、早く私に背せなかの刺青を見せておくれ、お前さんの命を貰った代りに、私は嘸さぞ美しくなったろうねえ」
娘の言葉は夢のようであったが、しかし其の調子には何処か鋭い力がこもって居た。
「まあ、これから湯殿へ行って色上げをするのだ。苦しかろうがちッと我慢をしな」
と、清吉は耳元へ口を寄せて、労いたわるように囁いた。
「美しくさえなるのなら、どんなにでも辛抱して見せましょうよ」
と、娘は身内みうちの痛みを抑えて、強いて微笑ほゝえんだ。
「あゝ、湯が滲みて苦しいこと。……親方、後生だから私を打うっ捨ちゃって、二階へ行って待って居てお呉れ、私はこんな悲惨みじめな態ざまを男に見られるのが口惜くやしいから」
娘は湯上りの体を拭いもあえず、いたわる清吉の手をつきのけて、激しい苦痛に流しの板の間へ身を投げたまゝ、魘うなされる如くに呻いた。気

狂じみた髪が悩ましげに其の頬へ乱れた。女の背後には鏡台が立てかけてあった。真っ白な足の裏が二つ、その面へ映って居た。
昨日とは打って変った女の態度に、清吉は一ひと方かたならず驚いたが、云われるまゝに独り二階に待って居ると、凡そ半時ばかり経たって、女は洗い髪を両肩へすべらせ、身じまいを整えて上って来た。そうして苦痛くるしみのかげもとまらぬ晴れやかな眉を張って、欄干に靠れながらおぼろにかすむ大空を仰いだ。
「この絵は刺青と一緒にお前にやるから、其れを持ってもう帰るがいゝ」
こう云って清吉は巻物を女の前にさし置いた。
「親方、私はもう今迄のような臆病な心を、さらりと捨てゝしまいました。――――お前さんは真先に私の肥料こやしになったんだねえ」
と、女は剣つるぎのような瞳を輝かした。その耳には凱歌の声がひゞいて居た。
「帰る前にもう一遍、その刺青を見せてくれ」
清吉はこう云った。
女は黙って頷うなずいて肌を脱いた。折から朝日が刺青の面おもてにさして、女の背せなかは燦爛とした。

底本：「潤一郎ラビリンス※（ローマ数字1、1-13-21）――初期短編集」中公文庫、中央公論社
1998（平成10）年5月18日初版発行
底本の親本：「谷崎潤一郎全集　第一巻」中央公論社
1981（昭和56）年5月25日
初出：「新思潮」
1910（明治43）年11月号
※表題は底本では、「刺青しせい」となっています。
※底本は新字新仮名づかいです。なお旧字の混在は、底本通りです。
入力：砂場清隆
校正：門田裕志
2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル